

# 國學院大學學術情報リポジトリ

『源氏物語』夕顔巻の表現方法：  
女房中将のおもとの和歌リテラシー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野, 真樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001460">https://doi.org/10.57529/00001460</a>

# 『源氏物語』 夕顔卷の表現方法

## ―女房中將のおもとの和歌リテラシー―

小野真樹

### 論文要旨

帯木卷冒頭の直後に、「雨夜の品定め」が描かれることに象徴されるように、帯木卷から夕顔卷までの三帖全体は、中の品という階層に目を見開かされた源氏が、そういう未知の女性たちとの新たな関係に挑戦してゆくという主題でほぼ一貫している。従って、夕顔卷では主人公は夕顔の君なのだが、一方で、「六条わたり」の女君が源氏のお忍びの謎めくお相手として挿話的に登場する。女房「中將のおもと」の和歌リテラシーによって、その謎の主人（実は六条御息所）が上の品の女君であ

ると間接的に暗示かんせつてきされている点は見逃せない。それは将来のおぞましい展開を孕みつつも、帯木三帖の一貫した主題は、なおも中の品の女君との交流を描くことの方だという作品の節度せつどを守る点において重要である。上流の女性の動きを対照的に捉えつつも、明確な人物像としては表現せず、間接を以って暗示する中將の優れた和歌リテラシーは主題と程よく寄り添うたよそめにも必要とされた。

### (1) はじめに

かりに散文であれ、平安中期の文学に和歌を含まない作品はない。そのことは和歌が平安貴族たちの生活に深く根づき、これなしでは彼らの高雅な日常を表現できなかつた事実を示唆しているだろう。だが、文学作品に見えるそれを単に人々の行動の痕跡の一齣として押さえるのでは十分でないのも確かである。特に『源氏物語』の場合、記事の最高潮の場面にこれを据え、あるいは作品展開の要諦

にそれらを配するなど、意識的な和歌の用いられ方がされている。これらは明らかに作品にとって都合のよいように和歌が接排されていると見ることができる。つまり、物語作品に窺える和歌は、平安貴族の現実を超えたところに存在しており、貴族たちが実際に詠み合っていたそれとは一線を画す事物なのである。物語の和歌は、我々の目に入る以前の段階で、既に作品形成のための一手段と化しており、純粹な生活痕跡やその模写の類などではない。そうした作品形成の過程において手段化されていく中、和歌の持つ多様な面が強調的に引き出され、様々な形で利用されていると言える。

旧稿でも論じたように、筆者はそうした作品形成のうちでも、作中人物の和歌の巧拙が作品展開に寄与させられる度合いが高いと考え、その個々人の能力差のことを「和歌リテラシー」と名づけて、注視を続けてきた<sup>1</sup>。むしろ、和歌を使いこなす能力の個人差は、現実の平安社会でも当たり前のよう存在していたはずであるが、物語は作中人物たちに対して自在にそれらを付与できた。誰それは歌のうまい人、彼それは癖のある詠み方の女性などという人物造型上の個性を、作品は好き勝手に設けることができたわけであり、そこに何らかの物語展開上の作為を問うことは十分に可能であるように思われる。先に触れた旧稿では、玉鬘や末摘花、近江君などの目立った個性の持ち主の、特に本人の和歌に対して注意を払ってきた。だが、今回は少し視点を変えて、当人ならざる周囲の和歌リテラシーが、女君自身の人物造型を示唆するために用いられている事例に目をつけてみたい。具体的には、夕顔巻において、女房「中將のおもと」の和歌リテラシーを語ることが、謎の女主人（実は六条御息所）を間接的に描く一手段となっている点である。

## （2）夕顔巻冒頭の書き出し「六条わたりの御忍び歩きのうらみ」

夕顔巻の女主人公は、言うまでもなく夕顔である。帚木巻の「雨夜の品定め」で、源氏は宿直のつれづれに先輩達が語った中の品の女性に興味をそそられ、その後、その種の相手との逢瀬を経験していくことになる。帚木・空蟬の両巻で空蟬、及び軒端萩との逢瀬があり、続く夕顔巻では夕顔との逢瀬と死別が話の筋の中心となる。もともと、夕顔の場合は、「かの下が下と人の思ひ捨てし住まひなれど」（p144<sup>2</sup>）などと、源氏が心内で思っており、途中までは中の品に満たない出自だと誤解していた形跡がある。したがって、

これに関しては中の品の女性への興味とは断定できないのかも知れないが、今はその点に深入りしない。ともあれ、この夕顔巻の冒頭は次のように始まる。

六条わたりの御忍び歩きのころ、内裏よりまかでたまふ中宿に、大弐の乳母のいたくわづらひて尼になりけるとぶらはむとて、  
五条なる家たづねておはしたり。(p135)

傍線部「六条わたりの御忍び歩きのころ」の「御忍び歩き」の事情は、後々に判明してくることだが、少なくともこの段階では、帚木巻で中の品の女に興味をそそられ、同巻、および空蟬巻において空蟬や軒端萩と関係を持つてきた源氏の本来通うべき女性は、六条界限の場所に、別に存在するということを匂わせたものらしい。しかも、そのことは作中の初見であるにも関わらず、「六条わたりの御忍び歩きのころ」という表現だけで、その女性の存在を読者に了解しろと言わんばかりである。あたかもこの人物を読者既知の存在のように語るがゆえに、帚木巻以前に欠巻「かかやく日の宮」を想定する説<sup>3</sup>さえあるが、ここでは結論の見えない成立過程説に寄りかかることはしない。むしろ、それよりも、上述したような、それが誰であるかを明らかにしないこの書きぶりを、この巻固有の筆法と見て、注意したいのである。

冒頭の「六条わたりの御忍び歩きのころ」という謎めいた書き出しで読者の関心をそそりながら、実際の話の本筋は大弐の乳母の病を見舞おうとして出くわした五条界限における出来事であった。あいにく門が閉ざされていたため、乳母の息子の惟光を呼びにやって鍵を探させている間、源氏の視線は隣の檜垣をめぐらす粗末な家居に向かった。

御車入るべき門は鎖したりければ、人して惟光召させて、待たせたまひけるほど、むつかしげなる大路のさまを見わたしたまへるに、この家のかたはらに、檜垣といふもの新しうして、上は半部四五間ばかり上げわたして、簾などもいと白う涼しげなるに、…  
(p135)

隣家を見た源氏の心内は、「門は葎のやうなる押し上げたる、見入れのほどなくものはかなき住まひを、あはれに、いづこかさしてと思ほしなせば、玉の台も同じことなり」(p136)と表現されている。貧しい佇まいながら、なぜか源氏には惹かれるものがあつた。そこで、その小家に咲いている白い夕顔の花をめぐって、源氏と隨身との間でしゃれた会話が交わされる。隨身の素性は近衛府などの

下級の官人に過ぎないが、さすがに源氏付きの人間ともなれば、高度なやり取りのできる者が選ばれているのである。

切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。源氏「をちかた人にもの申す」と独りごちたまふを、御隨身ついゐて、隨身「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」と申す。<sup>5</sup>げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、この面かの面あやしくうちよろほひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這いまつはれたるを、源氏「口惜しの花の契りや、一房折りてまゐれ」とのたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。(p136)

源氏の命令に従つて、隨身が門へ入ると、貧家ながら風情のある遣戸口から女童が現れ、白い扇に夕顔の一房を載せて差し出してきた。白扇は隨身、さらに惟光を介して源氏に渡されたものの、以後は見舞いの段取りに入り、その件は中断される。蒸し返されるのは、乳母邸を辞去する際のことであった。源氏が惟光に持ち寄せた紙燭で扇を見ると、「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」(p140)という歌が書いてある。貧家には似合わぬ風情の歌に興趣を覚えた源氏は、「寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔」(p141)と返歌を送るが、それを受け取つて調子に乗る侍女たちに呆れた使者の隨身が、さらなる返歌を待つことなく帰参したために、当該の贈答はそこで打ち切られる。

夕顔巻は、以上の出来事を発端として、本筋が形成される。ところが、先にも触れたように、それとは無関係に思われる「六条わたりの御忍び歩きころ」が冒頭に謳われ、あたかもいわくありげに語り出される筆勢には、やはり注意を払わないわけにはいかない。というのは、それに続く記事にも似たような傾向が見出されるからである。

「六条わたり」の登場する二度目は、「御心ざしの所」と表現が置換され、次のように描かれる。

御心ざしの所には、木立、前栽などなべての所に似ず、いとのかに心にくく住みなしたまへり。うちとけぬ御ありさまなどの気色ことなるに、ありつる垣根思ほし出でらるべくもあらずかし。つとめて、すこし寝すぐしたまひて、日さし出づるほどに出でたまふ。朝明の姿は、げに、人のめできこえんもことわりなる御さまなりけり。(p142)

傍線部「御心ざしの所には、木立、前栽などなべての所に似ず」とあるように、住まいの佇まいは並ではなく、乳母邸の隣家の貧相

な様子とは比べ物にならない。点線部「ありつる垣根」とは当該の隣家の檜垣のことで、そこに咲く夕顔の花に源氏がたく心惹かれた事実は言及した。源氏が「をちかた人にも申す」と口遊んだのがそれである。しかし、「御心ざしの所」では、それも点線部のように「思ほし出でらるべくもあらずかし」なのだ。

「六条わたり」「御心ざしの所」は誰と分からぬものの、邸の佇まいからして、高貴な身分の女君であることは推測できる。五条の貧しい家居と六条の「なべての所に似ず」の佇まいが対照関係に置かれながら、巻冒頭の物語が進行していくのである。しかも、その二人の女君は、双方とも謎の人物として、素性その他が全く明らかにされない。むしろ、この巻の主人公は五条の貧家の女君の方であり、「六条わたり」の女性の方は挿話的、かつ記事の分量も極めて少ない。しかし、ここで注目したいのは、その挿話的に挿入されていた女君の方である。

繰り返しになるが、この女性は冒頭に「六条わたり」とあり、次に「御心ざしの所」と記し直されたが、どちらの表現においても、どういう筋のどのような人物なのかという点は、一切明らかにされなかった。唯一、邸の様子に事寄せて、品位の高さが暗示されているだけである。こうした書き方は、直接的な説明を施さず、周囲の描写から暗示的に人物像を匂わせようとする、作品特有の表現手段と見られるが、このことは今の点に留まらない巻全体の筆致の特質として注意できるように思われる。

### (3) 後朝の場面の中将のおもて

その意味で、右のことの延長線上に捉えてよさそうなのが、源氏が「六条わたり」の女性と情交を持った晩、及びその後朝の情景である以下の掲出場面であった。A節冒頭はこの女君を指す表現としては三度目に相当するが、相変わらず「六条わたり」であり、ここでも誰なのが明らかにされない。この点には、なおも留意が必要であるように思われる。ともあれ、記事を眺めてみたい。

A 六条わたりも、とげがたかりし御気色をおもむけきこえたまひて後、ひき返しなめならんはいとほしかし。されど、よそなりし御心まどひのやうに、あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり。女は、いとものをあまりなるまで思ししめた

る御心さまざまにて、齡のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜離れの寝ざめ寝ざめ、思ししをるることさまざまなり。

B 霧のいと深き朝、いたくそそのかされたまひて、ねぶたげなる気色にうち嘆きつつ出でたまふを、中将のおもと、御格子一間上げて、見たてまつり送りましたまへとおほしく、御几帳ひきやりたれば、御頭もたげて見出したまへり。前栽の色々乱れたるを、過ぎがてにやすらひたまへるさま、げにたぐひなし。廊の方へおはするに、中将の君、御供に参る。紫苑色のをりにあひたる、羅の裳あざやかにひき結ひたる腰つき、たをやかになまめきたり。見返りたまひて、隅の間の高欄にしばしひき据ゑたまへり。うちとけたらぬもてなし、髪の下り端めざましくもと見たまふ。

源氏 「咲く花にうつるてふ名はつつめども折らで過ぎうきけさの朝顔

いかがすべき」とて、手をとらへたまへれば、いと馴れて、とく、

中将 朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞみる

と公事にぞ聞こえなす。

をかしげなる侍童の姿好ましく、ことさらめきたる、指貫の裾露げげに、花の中にまじりて朝顔折りてまあるほどなど、絵に描かまほしげなり。(p147・148)

右のA節によれば、六条わたりの女性はかつて源氏を容易に受け入れなかつたが、身を許した途端、その熱意は顕著に冷めていった、という。そして、年齢的に釣り合わないこともあって人聞きが憚られ、「いとどかくつらき御夜離れの寝ざめ寝ざめ、思ししをるること」とさまざまなり」という状況下に置かれている。つまり、「御忍び歩き」とは言いながら、現在は必ずしも源氏が夢中になって溺れている相手ではないらしいのである。

他方、B節は二人の逢瀬の翌朝が舞台であった。場面冒頭に「霧のいと深き朝、いたくそそのかされたまひて、ねぶたげなる気色にうち嘆きつつ出でたまふ」とあるのは、耽溺の一夜を思わせ、一晚では飽き足らなかつた源氏の深い執心を想像させる書きぶりとなっている。しかし、今見た直前のA節において、早くも倦怠期に突入した二人の関係が示唆されており、この叙述とは相反する文脈になっ

ている点は見逃せない。右の「ねぶたげなる」云々に関して、『新編全集』の頭注は、「立ち去りにくそうにふるまうのが、女の自尊心にそった思いやり」と説明しているが、上述の経緯から見て妥当であろう。女君との濃厚な一夜を耽溺したかに見える源氏は、実のところ、そうではなかった。そうした意外な裏事情を前文のA節が教えてくれる文脈なのである。

このB節は、源氏を見送る女房中将のおもと（以後、中将）の動向が中心である。逢瀬の床を立って帰途につこうとする源氏は、なおも「前栽の色々乱れたるを、過ぎがてにやすら」ったと語られる。先に述べた事実から考えれば、この「過ぎがて」の「やすら」いも、女君への執心を装う一種のポーズであろう。恐らく、「御頭もたげて見出し」ていた女君からの背後の視線を気にした意識的な行為だったと思われる。廊の方へ向かい、女君の視線が遮蔽されるに及んで、源氏は態度を緩める。と同時に、その源氏の目に飛び込んできたのは、見送りに同道した中将の傑出した美貌であった。折になつた紫苑色の羅の裳や、それを見事に着こなした腰つきのおおやかさ。さらに追い打ちをかけるように突き付けられた「うちとけたらぬもてなし」や「髪の下り端」という一点のすきも見せない美しさに、源氏は目を奪われる。高貴な相手ではまじまじと眺めることのできない女性のなまの容姿や所作を目の当たりにして、若い源氏は平常心を欠くのである。

注意しなければならないのは、この時の源氏の胸に去来する燃焼しきれなかつた思いであつたろう。それなりに体裁を繕つてはいたものの、源氏が女君との逢瀬に満足して帰るのではなかつた事情については、先に触れた通りであつた。むろん、そのことは中将も熟知していたに相違ない。そして、その満たされなかつた思いの反動によって、源氏の熱い視線が今自分自身の肉体に向けて注がれていることも、当然分かつていたものと思われる。「咲く花にうつるてふ名は」云々という歌は、この時の源氏の欲求をあからさまに伝えていて、余すところがない。こうした露骨な内容は、女房である中将を見下している証左と考えられ、少なくとも対等な女性に向けられる注意深い詠みぶりとは異質な物言いであつた。だから、もしも中将が源氏を受け入れるにしても、それは単なる慰みの対象ではない。しかしながら、かりに慰みものであれ、世に騒がれるほどの貴公子の熱い接近に対して、女性としての本能が疼かないこともなかつたのではないかと推測される。

## (4) 中将のおもむく宣旨の娘

むろん、その中将の心中に関して平静でなかったことは想像に難くない。こうした際の女房の葛藤を窺うには、濡標卷の宣旨の娘が参考になるだろう。二十九歳の春三月、源氏は流寓の地明石において待望の女兒を得る。宿曜の予言によれば、それは皇后にもなるべき尊貴な将来を背負った姫君だった。しかし、いくら運命的に今後が約束されていても、しかるべき努力なしには実現もおぼつかない。ことさらに重要なのは、后になるべく施される高度な教育であり、中でも乳母の選定には細心の注意が必要だが、明石では力量のある人材が見つかるとは思えない。京から送るにしても、辺鄙な田舎への下向が条件では見つかる保証もなかった。そのような数々の難問をくぐりぬけて、白羽の矢が立ったのが、宣旨の娘という女性だったのである。

この女性の父親は「宮内卿の宰相」であり（濡標卷P287）、天皇家関係の諸事に詳しいことはもちろん、末席ながら上達部だった。この身分は、乳母の父親として十分であるばかりでなく、同じく参議（宰相）の娘かと推測される夕霧の「宰相の乳母」（葵卷・P56）とも見事に釣り合っていた。母親は、先にも触れたように桐壺帝の宣旨女房であり、宮中の内情に通じていた（濡標卷P287）。加えて、当の娘自身も母の縁で、帝付きの女童として出仕していたため（同前P288）、皇室の何たるかを熟知していたものと考えられる。その女性が、男運の悪さか、「はかなきさまにて子」を産んで、生活に困窮している、という（同前P287）。少し都合良すぎる感もあるが、条件に何ら不足はなく、源氏は可能性を確信して声をかける。すると、あっさりと応じてきた（同前）。ただし、快諾は安請け合ひであり、宣旨の娘は承諾後も迷いの日々明け暮れる。間隙をついて、源氏はそのもとを密かに急襲した。

もののついでに、いみじう忍び紛れておはしまいたり。さは聞こえながら、いかにせましと思ひ乱れけるを、いとかたじけなきによろづ思ひ慰めて、「ただのたまはせむままに」と聞こゆ。（中略）人のさま若やかにをかしければ、御覧じ放たれず。とかく戯れたまひて、「取り返しつべき心地こそすれ。いかに」とのたまふにつけても、げに同じうは御身近うも仕うまつり馴ればうき身も慰みなましと見たてまつる。

源氏 「かねてより隔てぬなかとならはねど別れは惜しきものにぞありける

慕ひやせまし」とのたまへば、うち笑ひて、

宣旨の娘 うちつけの別れを惜しむかごとにて思はむ方に慕ひやはせぬ

馴れて聞こゆるをいたしと思す。

(濔標卷P287〜9)

傍線部「戯れたまひて」に関して、玉上琢彌氏は、「おだやかでないこともあるのであろう」として、情事が行われたものと解し、伊藤博氏も、「ここに情事がもたれたとみるのが妥当であろう」と指摘しているが、恐らくそれらの読みで間違いなからう。もちろん、愛情ゆえの行動でなく、源氏はこれで君臣の契りを固めて、相手の決意に駄目を押すつもりだったのかも知れない。「取り返しつべき心地こそすれ、いかに」という源氏の問いかけは、せっかく関係を持った宣旨の娘を明石に送るのが惜しくなったという意味であり、「かねてより隔てぬなかとならばねど別れは惜しきものにぞありける」の歌や、付言に添えた「慕ひやせまし」も同様の趣旨であるが、いずれも戯れであつて、冗談以上のものではない。上掲で歌と付言を受けた宣旨の娘が「うち笑」つたのは、その趣意が十分に伝わっていたためと思われる。

ただし、考えてみると、この仕打ちは宣旨の娘にとつて、いささか酷でなかつたこともない。この女性は、「この御あたりのことをひとへにめでたう思ひきこえて」(同前P287)と、源氏への憧憬ゆえに明石行きを申請け合ひした経緯があつた。だから、今回の源氏の言動が戯れ以上でないことを承知の上で、上掲文波線部のように「げに同じうは云々」と考えてしまうのである。その意味では、生まれた姫君のためからだを張つたつもり源氏の行為は、宣旨の娘の思いを逆手に取つた心ない所業だつたとも言えそうであるが、当の本人はそうした女心を内に秘めつつも、それを押し殺して、相手の口車に乗って揺らぐことはない。「うちつけの別れを惜しむかごとにて思はむ方に慕ひやはせぬ」と、主人となるべき明石の君に対する源氏の愛情を持ち上げ、甘言をさらりとかわして、一女房の立場に難なく徹するのである。源氏は、その見事な対処に、傍線部「馴れて聞こゆる」を「いたし」と思つて、感服する。

右の宣旨の娘の身の処し方と、先の中將の立場には通うものがあるだろう。前に見た夕顔巻の場面の源氏の贈歌は、「咲く花にうつるてふ名はつつめども折らで過ぎうきけさの朝顔」であつた。『新編全集』の現代語訳は、「咲く花のようなそなたに心を移したという評判が立つのは気がねなことだけれども、しかし、このまま手折らずに素通りはできかねる今朝の美しい朝顔よ」(夕顔巻P147)

としている<sup>10</sup>。主人の「六条わたり」から心移りをして、中将を我が物にしたい、という趣旨である。「いかかすべき」と源氏に誘いか  
けられ、手まで握られた中将だったが、即座に、「朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞみる」と切り返す<sup>11</sup>。相手の歌  
にあつた朝顔を主人の「六条わたり」に置き換えて、源氏をぴしゃりと撥ねつける。物語は、その中将の節度ある態度を、傍線部「い  
と馴れて、とく」と評している。中将は源氏の惑乱をいとも簡単に受け流し、女房としての職掌に徹して、主人を立てる返歌で応じた  
わけである。

このように考えると、自分に接近してきた源氏を「六条わたり」の主人に事寄せてかわした中将の和歌と、先の濔標卷の宣旨の娘の  
それとの間に類同の趣があることは了解されよう。が、同時に、そこには大きな相違が存在していた点も見逃してはならなかった。宣  
旨の娘とのやり取りに関して、前出の伊藤氏は、「(源氏は「小野」)相手の応答に才気と教養の度合をひそかにテストしている」と指摘  
している<sup>12</sup>。源氏は宣旨の娘を見つめ遣り、甘い言葉を放って、どう応じてくるかを試してみたのであろう。その際に、源氏のしかけた  
畏に引つかかってきたら、全てはご破産である。ところが、一瞬の情に流されない受け答えは、宣旨の娘の乳母、ないしは女房として  
の資質を見事に物語っていた。

しかし、夕顔卷における中将の資質が、この宣旨の娘と同様、源氏によって試されたとはとても思えまい。濔標卷の場合と異なり、  
夕顔卷の源氏はわずかに十七歳の血気盛んな若者である。そうした余裕があるはずもなく、そんなことをする動機もない。では、中将  
のこの姿が我々に訴えかけてくるものは何だったか。「六条わたり」の女性が立派な女房を抱えている、という事実以外ではないであ  
らう。そして、そのことが「六条わたり」の女性自身の優れた人となりや暗黙のうちに物語るしくみである。

##### (5) 女房の資質と和歌リテラシー

一概に決めつけることはできないが、物語文学における「女房」の原初的な様相を、『落窪物語』の「あこぎ」などに探ることは可  
能であろう。主人の幸いを切り開くために、知恵を絞り、腕を振るう。「あこぎ」の類の作中女房の活躍は、そのような低い身分の女

房たちが物語文学の担い手となってきた世相の反映として芽生えてきたものと考えられ、中世になると、その種の人物たちの作品内の役割がますます肥大化して、存在感も大きく増してくる。<sup>14</sup>『源氏物語』は、そのようにありようが増大して多様化してゆく前段階、もしくは過渡期と言えそうであるが、登場してくる女房の過半は主人を懸命に支える善良な忠僕であり、「あこぎ」のごとき素朴な原初型を基本的には保っているものと見られる。

若紫の乳母とおぼしき少納言という人物も優れた女房の一人であろう（若紫巻P242<sup>15</sup>）。玉鬘を養った夕顔の西の京の乳母も同じく忠誠の深い立派な人物であった（玉鬘巻P88）。これらは基本形を墨守した伝統的な女房像と言える。ところが、多くを『源氏物語』に学んだと見える『狭衣物語』には、かなり個性的な飛鳥井の女君の乳母が登場する。身寄りのない女君をそれなりに支えて殊勝であるかと思えながら、一方でこれを仁和寺の威儀師の手籠めにしようと思案したり、狭衣の子を身籠っていることを知りながら、その家司道成にさらわせたりと、奇妙な動きをする。こういう癖強い女房が登場してくるのも、物語史の上では「進化」の一つと思われる。『源氏物語』には、そこまで大胆な女房は出てこないが、望まない鬚黒を玉鬘に手引きした弁のおもと（真木柱巻P349）や、女三の宮のもとに柏木をいざなった小侍従（若菜下巻P223）など、主人のためにならない不穏な動きをする女房も散見され、多様化の萌芽が認められる。

しかし、右に挙げた弁のおもとや小侍従も、行動は不適切であったものの、それがその人物の質の優劣を物語ったり、ひいては主人の人格を云々したりするものではなかったろう。もともと、小侍従の場合は女三の宮の女房衆の一人だから、後述するように、多少その趣もないではないが、弁のおもとに関しては、玉鬘の不徳がこの女房の行動に反映したと考える読者は少なかつたように思われる。また、藤壺に源氏を手引きした王命婦についてもこれと同様であろう（若紫巻P231）。藤壺の人格が劣っているために、王命婦のような女房を召し抱えたというような読み方は、あまり一般的でなかったように感じられる。このように考えると、女房の質の高下は、その行動の適否と必ずしも軌を一にするものではないと言えるのかも知れない。

反面で、明らかに女房の行動が主君の人となりを象徴的に物語る事例も存在する。浮舟の異父妹「姫君」の女房衆の場合はそれである。八の宮に浮舟の認知を拒まれた母親（中将の君）は常陸介（当時は陸奥守）に嫁ぐ。母親は浮舟が長じると、その面目を考えて

良縁を求め、左近少将という血統の優れた男性との婚約をまとめる。しかし、その男は常陸介の財産が目当てであったため、浮舟が実娘でないことを知ると、相続上で不利になることを案じ、実子である異父妹へと乗り換える。その異父妹が「姫君」である。ちなみに、ここで「姫君」と括弧つきで記すのは、その呼称にふさわしい身分でないのに、常陸介を初めとする家族や一党からそう呼ばれているに過ぎないためである。

異父妹「姫君」にまつわって、物語は、

よき若人ども集ひ、装束ありさまはえならずとのへつつ、腰折れたる歌合はせ、物語、庚申をし、まばゆく見苦しく遊びがちに好めるを、この懸想の君達、「らうらうじくこそあるべけれ。容貌なんいみじかなる」などをかき方に言ひなして心を尽くしあへる中に、左近少将とて、……（東屋巻P19・20）

と記している。傍線部「よき若人ども」は、「姫君」付きの女房衆。これらが大勢雇い入れて、羽振りのよい生活に明け暮れているという文脈であるが、「腰折れの歌合せ云々」とあるように、詠みあう歌は水準が低く、雅楽などにいそしんでも、「まばゆく見苦し」いものだった、という。さらにそれらを目当てに近寄って来る「懸想の君達」の人間性については、語るに落ちると言ったところであるが、そうした中に、浮舟の婚約者に擬された「左近少将」もいた。「左近少将」の人格も推して知るべしという意味に違いない。上記には、「姫君」その人の描写は皆無であるが、女房を中心とする周辺人物たちの無様な行動を通じて、文化水準の低い人格がそれとなく暗示されている。

その観点から言えば、先の小侍徒を含む女三の宮の女房衆も似たようなものだったろう。浮舟の異父妹の「姫君」などと異なり、こちらは主人の身分が身分であるだけに、さすがに作品における物言いも露骨な戯画化を志向してはいない。しかし、新婚四日目、紫の上を夢に見た源氏が朝早々に床から引き上げる出来事があった。「今朝の雪に心地あやまりて、いとなやましくはべれば、心やすき方のためらひはべる」と不始末をわびる源氏に、先方は「御乳母、『さ聞こえさせはべりぬ』とばかり、言葉に聞こえたり」という調子である（若菜上巻P70）。むしろ、源氏の行動に対する不快感はあったろう。だが、こうした場合は歌で応じるのが当然の礼儀であり、明らかに豊かな情感に欠ける心ない対応であった。ゆえに、「ことなることなるの御返りや」と源氏からも不満が漏れる。

およそ、女三の宮の女房衆は、主人の不出来を承知している引け目か、身分を笠に着て、必要以上に居丈高に構える姿勢が目立つ。だから、源氏の行き届かない行為に対して、「姫宮は何とも思いたらぬを、御後見ども（女房衆Ⅱ小野）ぞやすからず聞こえける」（同前p86）といった、出過ぎた態度も取るのである。この種の印象の悪い高圧的な姿勢の女房としては、これ以前にも雲居雁の大輔の乳母がいた。雲居雁の仲を裂こうとする内大臣（いわゆる頭中将）の意を体し、「もののはじめの六位宿世よ」と、夕霧をあからさまにこき下ろす人物である（少女卷p57）。主君雲居雁のために一生懸命なのであろうが、我々読者に感じの悪い印象を与える異形の女房衆と言つてよい。ただし、この大輔の乳母と先の女三の宮の女房衆とは顕著な違いもあった。

女三の宮の女房衆の不出来ぶりは、夕霧の見聞に基づく、

いと若くおほどきたまへる一筋にて、上の儀式はいかめしく、世の例にしつばかりもてかしづきたてまつりたまへれど、をさをさけざやかにもの深くは見えず、女房なども、おとなおとなしきは少なく、若やかなる容貌人のひたぶるにうちはなやぎさればめるはいと多く、数知らぬまで集ひさぶらひつつ、もの思ひなげなる御あたりとはいひながら、何ごともどやかに心しづめたるは、心の中のあらはにしも見えぬわがなれば、身に人知れぬ思ひ添ひたらむも、また、まことに心地ゆきげにとどこほりなかるべきに、しうちまじれば、かたへの人にひかれつつ、同じけはひもてなしになだらかなるを、ただ明け暮れは、いはけたる遊び戯れに心いれたる童べのありさまなど、院はいと目につかず見たまふことどもあれど……（若菜上卷p133・134）

とあった記事が、最も端的に言い表している。表面上の格式の高さとは裏腹に、落ち着きを欠いた女房衆の不出来な様子がまざまざと描かれている。次元としては大きな相違があるものの、先に眺めた浮舟の異父妹「姫君」の女房衆の描かれ方と、本質的な意味での差異はあまり感じられない。

しかし、同じく印象の悪い雲居雁の大輔の乳母は、けっして無能な人物ではなく、しっかりと実質は備えていた。雲居雁との仲を許され、さらに中納言に昇進すると、それまで忸怩たる思いを禁じえなかった夕霧は、ここぞとばかり、この人物に対してはつきりと物を言い、溜飲を下げる。

女君の大輔の乳母、「六位宿世」とつぶやきし宵のこと、もののをりをりに思し出でければ、菊のいとおもしろくうつろひたる

を賜せて、

「あさみどりわか葉の菊をつゆにてもこき紫の色とかげきや

からかりしをりの一言葉こそ忘れね」と、いとにほひやかにほほ笑みて賜へり。恥づかしくいとほしきものから、うつくしう見  
たてまつる。

「二葉より名だたる園の菊なればあさき色わく露もなかりき

いかに心おかせたまへりけるにか」といふと馴れて苦しがる。(藤裏葉卷p455)

露骨に怨念を振りかざさず、「いとにほひやにほほ笑」んだ顔で苦言を呈した夕霧も上品であったが、「二葉より云々」と謝罪の申し  
開きをして、鮮やかに撤収した大輔の乳母の物腰も見事であった。その対処の的確さを、右の記事の傍線部は、「いと馴れて苦しがる」  
と記している。傍線部の「馴れて」という評言と同じ言い回しが、先に眺めた中将や宣旨の娘の場合にもあったことは記憶に新しくあ  
らう。何か動じるような事態に遭遇しても、つつがなくさらりと歌でかわすのは、女房としてあるべき姿なのであり、そうした態度を、  
この物語では「馴れて」と前向きに評価するのである。<sup>16</sup> そのような意味では、印象の良し悪しは別として、雲居雁の大輔の乳母の行動  
は女房として十分に合格であり、これも優れた人材の一人に入れてよかつたように思われる。

### (6) 近江の君や末摘花の場合

このように見てみると、『源氏物語』においては、女房の質の高さを和歌の詠み方に事寄せて表現する場合がしばしばあることが分  
かる。旧稿<sup>17</sup>で多少論じたことでもあるが、内大臣女の弘徽殿女御の品格を物語るために、女房中納言の君(以下、中納言)の代表作が  
用いられた事例をここで反芻してみよう。

内大臣は、御落胤の近江の君を自邸に迎えたものの、甚だ期待外れの人物であったため、厄介に思い、正妻腹の弘徽殿女御の女房に  
することを考えついて、その方針を本人に通告する。これを歓迎した近江の君は、女御への挨拶の機会を窺うが、うまく見出せず、里

帰りで宮中から下がってきた折を見計らって、拜調を請う文を贈った。その歌「草わかみひたちの浦のいかが崎いかであひ見んたこの浦波」(常夏巻P249)は、「いかであひ見ん」に趣意があるものの、他は脈絡の見えない地名の羅列である。

これを眺めた弘徽殿女御は苦笑を浮かべて困惑する。相手の近江の君に引きずられて、迂闊に同類の和歌を返したら、女御の沽券にかかわる。だが、朗々と高雅な歌を披瀝しては相手を傷つけ、これも女御の品位を落とすことになるだろう。処置に窮した女御は、「返り事、かくゆゑゆゑしく書かずは、わろしと思ひおとされん。やがて書きたまへ」(同前P250)と侍女の中納言に代作を命じる。「ゆゑゆゑしく」は、格調が高いことを意味するが、引歌や歌枕を乱用する近江の君の和歌に対する皮肉であった。こうした場合の対処がいかにか難しかったかを、女御の言葉は雄弁に物語っているが、一流の女房であれば、この種の「危機」も巧みに切り抜けて当然なのである。

任された中納言は、「をかしきことの筋にのみまつはれてはべめれば、聞こえさせにくこそ」(同前P250)と謙遜するものの、相手の失望を誘わぬように女御の自筆を装い、「ひたちなるするがの海のすまの浦に波立ち出でよ箱崎の松」(同上)と苦もなくパロディ風の返歌をまとめた。だが、いくら相手に合わせたとは言え、こういう珍奇な歌を自分の筆に似せて贈られては困る。女御本人は難色を示すが、中納言は「それは聞かむ人わきまへはべりなむ」(同前P251)と言いきって、返歌を強行する。優れた詠歌を駆使できるだけではない。時と場合によって、こういう奇妙な歌をも自在に操る手腕や果断に富んだ判断を示せる資質が、この作品の女房には求められているのである。むろん、中納言は余裕綽々で及第の域に達する存在だったろう。そして、そういう力量ある女房を召し抱えていることが、間接的に弘徽殿女御の皇妃としての秀逸な資性を物語るしくみなのである。

ところで、この近江の君の話は、この後に登場する行幸巻の末摘花の記事において連想をうながすに違いない。かねてより、末摘花は和歌に必ず「唐衣」を詠み込む癖があった。

からころも君が心のつらければとはかくぞそほちつつのみ(末摘花巻P299)

きてみればうらみられけり唐衣かへしやりてん袖をぬらして(玉鬘巻P137)

後者「きてみれば」の歌を贈られた際に、源氏は「古代の歌詠みは、唐衣、袂濡るるかこそ離れねな」(玉鬘巻P138)といっ

て末摘花の型にはまった詠みぶりを陰で批判している。さらにその後、玉鬘の裳着祝いの御祝儀に、時代遅れの装束が贈られてきた。そこにも「唐衣」が詠み込まれた歌が添えてあり、これで都合三度目となる。

わが身こそうらみられけれ唐衣君がたもとなれずと思へば（行幸巻P315）

元来、装束は上位者から下位者へと授けられるものであり、末摘花が玉鬘へ贈与するのはそれなりに気を配るべきものでなければならなかった。その点を以って、眉を擡めた源氏であったが、寛容にも玉鬘には返事を出すよう、一旦は指示する。ところが、添えられた歌に目を転じた途端、源氏は前言を翻し、みずから詠者となって返歌を差し向けた。その歌が、「唐衣またからころもからころもかへすがへすもからころもなる」（行幸巻P315）だったのである。相手を嘲弄する機知であるという点において、先の中納言の返歌と通ずるものが感じられるだろう。

ただし、中納言の場合と違う点は、これを養父たる源氏が詠んだところであった。玉鬘自身が、まさか末摘花を愚弄する歌を詠むわけには行くまい。それでは姫君としての玉鬘の品格が問われてしまう。しかし、かと言って、源氏が詠むのも少し奇妙ではなかったか。これには少し特殊な事情が看取されよう。

玉鬘に先の中納言のごとき切れ者の女房がいたら、何らか工夫させるところであったろうが、実はそれがかなわなかった。「人々も、ことにやむごとく寄せ重きなどもをさをさなし」（虫巻P197）と語られている通り、玉鬘の女房衆には有能な人材がいなかったからである。むろん、そうした人間が不在では貴族女性は務まらない。だから、「母君の御をぢなりける宰相ばかりの人のむすめ」（同前）という母方の従姉妹の「宰相の君」を探し出してきて、「さるべきをりをりの御返りなど」を書かせていた。だが、これとて、所詮今述べた「をさをさなし」の範疇で語られる最低限の存在である。そもそも、玉鬘の女房衆は、上京時には概ね失われており（玉鬘巻P127）、六条院入りが決まってから、「市女などやうのもの、いとよく求めて率て来」（同前）という、およそまともとは思えない手順で確保した人々だった。市女などを介して連れて来られた女房に人を翻弄するような和歌を詠める資質の人間は期待できない。だが、それが玉鬘の置かれた偽らざる現実だったのである。

源氏みずからが、末摘花の和歌に向けて皮肉な対応に打って出たのは、むろん相手の身分の問題もあつたらう。いくら人柄に難があ

ると言っても、先方は故常陸宮鍾愛のご令嬢である。その人物に対して嫌味な和歌を送りつけたら、かりに代筆であれ、玉鬘の見識が問われるのは疑いない。そういう意味では、ここで源氏がそうした汚れ役を買って出たのは、むしろやむをえない経緯だったと見ることもできる。だが、記事の意味はそれに留まらない。作品はそのような必然の流れに絡めつつ、先の弘徽殿女御の場面との連想を通じて、その反対に玉鬘が女房衆に恵まれていない事実をさりげなく我々に伝えてくれるのである。女房に恵まれない玉鬘の宿運は、やがてこれが仇となって、望まない鬚黒との結婚が実現する筋立てへと発展する。とすれば、この末摘花の場面もそのような玉鬘求婚譚の終結を睨んだ布石にも見えてくるのであるが、さすがにそこまで読み込むのは穿ち過ぎと言うべきであろうか。

女君の人柄が仕える女房衆の集団の雰囲気と反映されるという発想は、物語特有の論理ではなく、現実社会における把握のしかたであつたに違いない。その種の発想法が『紫式部日記』にも見出せる。大齋院女房の中将の君の消息文にまつわる章段（『紫式部日記』P193〜200<sup>19</sup>）では、そちら方と中宮方とのそれぞれの女房衆の気風が比較されている。齋院方は「よしよししうおはすべかめる所のやう」（P194）であり、彰子方は「かならずしもかれ（齋院方＝小野）はまさらじ」（同上）と、紫式部はあつさりとは劣勢を認めないものの、そうした齋院方の気風は、「院はいと御心のゆゑおはして、所のさまはいと世はなれ、かんさびたり。またまぎることなし」（同上）という、齋院自身の人柄や御所の生活に由来すると説明され、一方の彰子方は、「上にまうのほらせたまふ、もしは、殿なむまゐりたまふ、御宿直など」（P194）といった後宮の諸事にまぎれ、しかも、「内裏わたりにて明け暮れ見ならし、きしろひたまふる女御、后おはせず」（P195）のためか、まともな女房は「おほるけにて出でゐはべらず」（同上）、上臈中臈女房にいたつては「あまりひきいりざうめきてのみはべるめる」（P196）と批判し、それは中宮の「あまりものづつみせさせたまへる御心」（同上）に原因があると、紫式部は分析している。

このような現実世界のなまの感覚を表現形成の手法に転用し、女房の動きを合わせ鏡のごとく使って、間接的にその主人の女君のありようをかすめ描く方法を『源氏物語』は確立した、と言えるに違いない。そして、その嚆矢ともいえるべき記事が、当論冒頭で眺めた夕顔巻の「六条わたり」の中將の場面だったのである。この手法を使って、中將の動きの裏側に、「六条わたり」の女君の姿を透写させることに成功した結果が、以降の物語にこれを援用させる原動力となつたに相違ない。そういう意味では、この中將の登場記事に見

られる筆法は、作品全体に対して大きな影響を与えたことになる。

### (7) 中将の和歌リテラシーと夕顔巻

しかるに、物語は、なぜ夕顔巻の当該場面に対して、この描法を適用したのであろうか。知られるように、この巻は帚木、空蟬、夕顔と続く、いわゆる帚木三帖の掉尾を担っている。この巻末は、

かやうのくぐりだきしきことは、あながちに隠るへ忍びたまひしもいとほしくてみなもらしとどめたるを、など帝の皇子ならんか  
らに、見ん人さへかたほならずものほめがちなると、作り事めきてとりなす人ものしたまひければなん。あまりもの言ひさがなき  
罪避りどころなく。(p195・196)

となっており、これを跋文に見立てる形で、帚木巻の冒頭は、

光る源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすき事どもを末の世にも聞きつたへて、軽び  
たる名をや流さむと、忍びたまひける隠るへごとをさへ語りつたへけん人のもの言ひさがなさよ。さるは、いといたく世を憚りま  
めだちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少将には、笑はれたまひけむかし。(帚木巻p53)

といった具合に、序文として呼応するように書き出してあった。右の帚木巻冒頭の直後に、「雨夜の品定め」が描かれることに象徴されるように、三帖全体は、中の品という階層に目を見開かされた源氏が、そういう未知の領域の女性たちとの新たな関係に挑戦してゆくという主題で、ほぼ一貫していることは、先にも少し触れておいた。

もつとも、それは単に主題だけの問題ではなかったに違いない。帚木三帖では、源氏が今まで見知らなかった中下層の女性たちの生活空間に足を踏み入れ、そのような世界が現実中存在することを改めて認識することを物語の基盤にしている。そういう意味では、この三帖は源氏の日常生活圏を抜け出したところに展開される異空間の物語であると言ってもよかつただろう。帚木巻の紀伊守邸は泉の湧出する覚醒の空間であつたし、夕顔巻の五条も源氏の耳目に触れたこともない醜穢な陋巷であつた。場所としては、いずれも源氏

の生活圏に程近い土地ながら、それまで意識の片隅にもなかった別世界であるかのように設定されている。これらの巻々は、源氏の栄華への道を語る『源氏物語』の本筋とは意識的に描き分けられており、単なる挿話である。女主人公であった空蟬、軒端萩、夕顔も、桐壺巻、若紫巻、紅葉賀巻以下へと続く主要な物語には名前や姿を一切現さない。ただ、逆にこれらの傍流の巻々には、主要な女君たちも名や顔を一応出すのだが、あくまでも立場は脇役に過ぎない。

例えば帚木巻には、紀伊守邸へ方違えに行った源氏が、自分の忍び歩きの噂をしている女房衆の話を盗み聞き、「思すことのみ心にかかりたまへれば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむを聞きつけたらむ時」と事の露見を恐れる場面があるが（p95）、これは藤壺を念頭に置いたものであった。また、女房衆の噂話は、「式部卿宮の姫君に朝顔奉りたまひし歌などを、すこし頼ゆがめて語るも聞こゆ」（同p95）へと続く。朝顔の姫君との交流を指しているようであるが、こうして名前は見えるものの、これらの主要な女君たちが、帚木三帖の巻々で何らかの動きを示すわけではないのである。むしろ、葵の上は正妻の地位にあるだけに扱いは別格であるが、これらの巻における上流の女君の大半は、暗示的に存在が示される程度であった。そうしたことが未知の領域に生きる女性たちと源氏との交流を描こうとする帚木三帖の主題との兼ね合いで生じる現象であったことは無論である。

こうした観点で言えば、帚木三帖において、「六条わたり」の女君は、藤壺や朝顔以上に重要な位置を与えられていたことになるに違いない。夕顔巻冒頭で、その存在を謳われることもしかり、また名ばかりを取り沙汰される藤壺たちとは異なり、実際に源氏との逢瀬を描写されているなど、扱いは傑出しているように思われるのである。それは後半部に姿を現す物の怪のかかわりなどを含め、夕顔巻の話柄全体とこの人物との分かちがたい関係を示唆しているようにも将来のおぞましい展開の予兆とも思われるが、既に紙幅は尽きており、そのことに触れているゆとりはない。しかし、上流と思われる「六条わたり」の女君にそうした重要な役割を担わせながらも、なおも中の品以下の女性との交流を描くという、作品の節度が守られなければならない点は重要であり、見逃せまい。確固として、上流の女性の動きを具体的に捉えつつも、明確な人物像としては表現せず、間接を以って描く。作品が頑固に守ろうとした帚木三帖の主題に寄り添うためにも、中将の優れた和歌リテラシーは必要とされたのである。

- 1 小野真樹『源氏物語』玉鬘巻と和歌リテラシー』『日本文学論究』（國學院大學國文學會平成二十七年三月）
- 2 当論の『源氏物語』の本文・頁数は、『新編 日本古典文学全集』（小学館・平成六～十年）により、特に巻名を記さない場合は夕顔巻を指す。なお、文中では当該書を『新編全集』と略称する。
- 3 風巻景次郎『源氏物語の成立』（風巻景次郎全集4）（桜楓社 昭和四十四年）
- 4 大津透執筆「隨身」『平安時代史事典』（角川書店 平成六年）
- 5 『古今集』巻十九・雑体（旋頭歌）・一〇〇七番歌「うちわたす遠方人にも申すわれ その所に白く咲けるは何のはなぞも」の第二句「をちかた人にも申す」を口遊んだ源氏の独り言を問いかげに見立てた隨身が、同歌の下句を念頭に、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる」と答えたもの。なお、『古今集』では次の一〇〇八番歌との贈答になっており、そちらに「春されば野辺にまづ咲く」云々とあるため、「白く咲ける花」は「梅」と解されているが、隨身はそれをもじって夕顔にすり替えた。
- 6 三谷栄一「夕顔巻と古伝承」『講座 源氏物語の世界第一集』（有斐閣 昭和五十五年）
- 7 『源氏物語評釈 第三巻』p283（角川書店 昭和四十年）
- 8 濬標『源氏物語講座 第三巻』（有精堂出版 昭和四十六年）
- 9 吉海直人「平安朝の乳母達——源氏物語——への階梯——」第十四章（世界思想社 平成七年）
- 10 吉見健夫「源氏物語における女房の和歌——夕顔巻の源氏と中将の君との贈答歌をめぐって——」（『源氏物語と平安文学 第4集』早稲田大学大学院中古文学会研究会平成七年）は、「てふ」に「蝶」、「折らで」に「居らで」がかけられていると見るが、傾聴に値する理解であろう。
- 11 「花に心をとめぬとぞみる」の「とめぬ」が打消であるか完了であるかをめぐっては、議論があるが、話が脇道に逸れかねないので今は触れない。なお、注10の吉見論文、及び上野英子「夕顔巻における源氏と中将の君との贈答歌をめぐる考察」（『むらさき』昭和五十七年七月）を参照。
- 12 注8に同じ。
- 13 三谷邦明『落窪物語（新編 日本古典文学全集）』（小学館 平成十二年）の「解説」
- 14 豊島秀範『物語史研究』第四章五節（おうふう 平成六年）

- 15 同頁に「聞こゆるさまの馴れたるに、すこし罪ゆるされたまふ」とある。
- 16 注10 吉見論文に「馴れて」が女房の歌を評するキーワードであるとするとする指摘がある。
- 17 小野真樹「近江の君の添え句―『源氏物語』の和歌リテラシーという視点から―」（『国学院大学大学院平安文学研究』第七号 平成二十九年三月）
- 18 折口信夫「ほうとする話」『折口信夫全集 第2巻』（中央公論社 平成七年）、「神道に現れた民族論理」『同第3巻』（平成七年）
- 19 当論の『紫式部日記』の本文・頁数は、『新編 日本古典文学全集』（小学館 平成六年）による。
- 20 大津直子『源氏物語の淵源』第二編第二章「紀伊守邸の〈泉〉」（おうふう 平成二十五年）
- 21 秋山虔『源氏物語（岩波新書）』（岩波書店 昭和四十三年）
- 22 武田宗俊後記挿入説『源氏物語の研究』（岩波書店 昭和二十九年）。同書は、成立過程を論ずることが主旨であるが、当論はその立場は取らず、紫上系（若紫系）と玉鬘系（帚木系）との単なる描き分けと見る。

